

## 若き日の柳川先生

高木 きよ子

(昭和31年修士修了)

柳川先生が明年3月いよいよ定年退官されるとうかがい、今更のように歳月の早さに驚いております。御本人の柳川先生はさぞや感慨無量でいらっしやることと拝察いたします。

その昔研究室で何かとお世話になった者として、思い出すことを記させていただきますが、何せ記憶もさだかでなく、思い違いも多々あるかと存じます。失礼の段は何卒お宥下さいますよう。

柳川先生にはじめてお目にかかったのは何時のことでしたか、よく覚えておりませんが、戦後まもなくの東大で、現在とまったく同じの古色蒼然とした建物の中の、これまた外形は現在とほとんど変わっていない研究室の、本と書類が山づみになった薄暗りの中に、大分くたびれたカーキ色の折襟の服を召された柳川先生が立っていらしたのが、今でも目に浮びます。敗戦直後のことで日本人は皆飢餓状態におかれていましたから、げっそり痩せて生氣のない人ばかりでしたが、柳川先生もそのお一人でした。

研究室では夕方皆が引上げたあと小さな電気コ

ンロで自炊をされて、そのあと夜半まで、あるいは寝とまりして勉強していらしたのではないのでしょうか。それこそ文字通り研究室と寝食をともにされたといえます。当時は電気が時間制でしたし、その上停電もかなりありました。また戦災にあわれた先生方で研究室に起居して居られた方もあった時代でした。

そんな環境の中で柳川先生は昭和23年に卒業なさり、卒業論文に万葉集の神信仰を扱われたように記憶しています。その後大学院時代、高木宏夫氏と宗教意識の調査を手がけておられました。それを手はじめに山岳宗教をはじめ、各種の調査に入られました。今は調査もコンピューターで簡単に集計できる結構な世の中になりましたが、あの頃はワラ半紙に騰写版刷りの質問表で集計も計算尺でパーセンテージを出すという手工業の時代でしたから時間もかかり資料も山のようになりました。当時図書館内の教官研究室に岸本先生の部屋があり、そこが調査の専用室のようになっていました。本郷三丁目の角に進駐軍の放出物資を売る

店があり、そこで買った暗緑色の木製の四段のキャビネットが資料入れにあてられていたことを思い出します。そのキャビネットは当時は珍しかったので、個人用に皆も購入しましたが、「家ではオムツが入ってますよ」といって笑って居られたのが柳川先生でした。

山岳宗教の調査ではずい分御一緒させていただきました。岸本先生が米国ロックフェラー財団の研究費を得られての研究に調査班として参加させていただいたのですが、かれこれ7～8年つづいたでしょうか。大和の三輪山を手はじめに、出羽三山・岩木山・木曾御獄山、近いところでは日光・筑波山・加波山などへまいりました。そういう調査の折、グループで年少でいらした柳川先生は、実に骨身惜しまず、村中を駆け廻って聞き取り調査に励んでおられました。昭和29年の夏は、ほとんど一夏中東北地方の調査で過ぎましたが、あれは何処でしたか、調査の終わった夜、暗い灯の下で池上広正先生を中心に「お化け」の体験談をしたことがありました。そういう時柳川先生は何時も聞き役に廻っておられました。

はっきりとは覚えておらず、多分話は前後しますが、柳川先生が一時宗教学廃業宣言(?)をな

さったことがありました。そのいきさつ等はまったく存じませんが、これが最後という学会で実にいい発表をされて、やがていつの間にか廃業を廃業されたのは、宗教学にとって誠にうれしいことでした。

岸本先生の図書館葬の時の、門下生代表として読まれた切々たる弔辞を御記憶の方も多と思います。戦中から戦後にかけて岸本先生のもとで宗教学徒としての道を歩んで来られた方の恩師への謝意と決別の辞は、あの文末の「さようなら云々」という言葉とともに今でも彷彿といたします。

昭和36年に私が定職を得てからはあまりお目にかかる機会もなく、仕事を御一緒にさせていただく折もなくなりました。「食うべき仕事」にかまけているうちにどんどん時間はたち、柳川先生ともみるみる距離が遠くなりました。先生に直接教えを受けられた方々を羨しく思う一方、自分の怠慢をつくづく後悔しています。

人生百年の現在、どうぞ御退官後は御健康回復に努められ、御健康をとり戻されて従来にもまして宗教学の先達として真価を発揮されますようにと念じております。